様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ９ 日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2013～2016
課題番号：２５５５０１００

研究課題名（和文）震災後社会におけるリジリエント・コミュニティ構想に向けた基礎的研究

研究課題名（英文）Fundamental research towards the resilient community concept in post earthquake society.

研究代表者
結城　俊哉（YUKI, Toshiya）

立教大学・コミュニティ福祉学部・教授

研究者番号：２０３０６３７７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、3･11東日本大震災の被災地域への継続訪問を実施した。その活動を通して現地での生活再建とコミュニティの再生に取り組む当事者グループとの関わりから、震災当事者のコミュニティ復興に向けたリジリエンスに関する聞き取り調査研究を行った。本研究を通して、被災者経験者にとって「震災体験を忘れない」為の研究が求められていることが明らかとなった。その結果、被災者が持つリジリエンスの意味をライフヒストリーの形式で「3・11以後、山元町で生きる。～被災コミュニティで暮らす住民の記憶のアーカイブ～」という報告書を作成した。

研究成果の概要（英文）：In this research, we conducted a continuous visit to the afflicted area of the 3.11 East Japan Great Earthquake. Through its activities, people involved in the earthquake disaster interviewed researches on resilience towards community reconstruction, from the relationship between the parties involved in the rebuilding of the local community and the revitalization of the community. Through this research, it was revealed that for those experienced by the victims, research is required to "Do not forget the experiences of the earthquake disaster". As a result, we made a report on the meaning of the resilience of the victims as a life history " Living in Yamamoto Town after 3.11, Archive of the memory of the local residents living in the affected community" report.

研究分野：社会福祉学

キーワード：リジリエンス　3.11東日本大震災　ライフヒストリー　震災コミュニティ　震災当事者　フィールドワーク

１．研究開始当初の背景

（１）本研究の開始当初の背景には，2011 年 3 月 11 日の東日本大震災以後，我が国が直面している震災後の日本社会のあり方として「被災した地域住民（被災者）の生活再建を可能にするコミュニティの創成／再構築の視点とは何か」という課題に取り組む状況下にあった。

（２）そのような状況の中で大震災・津波の被害による被災体験からの復興・再生・再建に向かう新しいコミュニティ作りの要件として「リジリエンス（回復力／逆境力）」の視点から「震災被害から復興力を発揮するコミュニティのあり方」を構想しその基盤を明確化するフィールドワーク調査を基本とした基礎的研究としてはじめられた。

２．研究の目的

（１）2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災を起点として本研究が取り上げた「リジリエンス（resilience）とコミュニティ」の問題は、持続可能なコミュニティの構想にあたって、近年注目されている概念である。生物の多様性を起源とする「ダイバーシティ」(diversity)が、人間の多様性という観点から社会のあり方を捉えるのに対し、リジリエンスとは、心理学分野では、困難な状況にも関わらず，うまく適応する過程・能力・結果のことをさしている。近年では、変化する状況や予期せぬ出来事（困難な状況）に対して十分な適応を示し、利用可能な問題解決策のオプションを選択できるという意味で、レジリエンス概念に注目されている。この概念が、自然災害に対する社会の回復（復元）力や弾力性という意味にも使われるようになった。

（２）本研究は、東日本大震災後の復興の過程で、震災直後の生命維持、ライフラインの確保など生命・健康維持の段階から、生活再建の段階の状況下で展開された。被災地の人々は喪失したコミュニティの再建とそこでの生活再建へ至る段階で、コミュニティ再生計画への参画、新たな人間関係の再構築、地域住民として復興支援に携わる支援者・ボランティアとの関係づくりなど、リジリエントなコミュニティ形成という新しい困難な地域課題に直面した。

（３）本研究では、被災地の住民が直面しているリジリエントなコミュニティには、被災地の住民同士の相互扶助（共助）の中から郷土における文化・伝統の継承者として学びあい、あるいは専門家、行政関係者との協働にもとづく相互学習のプロセスとして被災住民自身が、「震災前後を起点とする自己のライフストーリー／ライフヒストリー」の組み直しの展開がなされることがコミュニティの再生の「質」を左右するという事実の解明を目的とした。

３．研究の方法

研究方法は，環境創成の視点から被災地の経験で暮らすことを決意した被災者の 3.11 震災体験の「以前と直後と以後」を俯瞰した生活史（ライフヒストリー）の聞き取り調査を実施し，震災以後の持続可能なコミュニティ創成に関わる地域住民（被災当事者）の経験知に関する問題を探求するフィールドワーク研究を方法論とした。

（１）研究１（地域リジリエンス研究）震災（3.11）経験が日本社会に与えた影響に関する社会教育学及び地域福祉文化論的検討

この研究１では，震災後の地域社会において防災対策から予想できない自然災害への対応策として減災対策のあり方が検討されてきていた。従来，地域福祉の対象者であった高齢者・障害者・母子・子ども等を「災害弱者」をはじめ，すべての地域住民が否応なく巻き込まれる自然災害がコミュニティを襲った時，住民の安心・安全を守り，今までの防犯・防災への備えからさらに減災対策までも視野に入れたコミュニティ再生・復興プランの具体案が現在，震災地域では住民と行政を巻き込んで議論されていた。現状においてトップダウン的復興（コンパクトシティ）計画は，当初からフィールドでの被災各地で地域住民とのコンフリクトを生んでいた。本研究では，地域住民同士が被災経験という共通体験でつながりながら，歴史的な地域伝承文化を手がかりとして被災経験を自分たちが暮らす街（まち）の復興プランの形成過程にどのように組み込んで来たのかを住民の目線から描き出した。例えば，地域の祭りや行事の復活を手がかりに地域文化の保全の重要性を共有することへの社会教育学及び地域福祉文化論的検討をとおしてコミュニティのリジリエンス（回復力・適応力）を導く条件とは何かを解明することにした。

（２）研究２（地域生活回復力研究）コミュニティにおける住民の連帯（ネットワーク）と生活再建のための生活福祉及び健康ニーズの解明と当事者支援方法についての検討

この研究 2 では，コニュニティにおける地域住民の連帯とは何かについて，そして，その生活再建に向けた生活福祉及び健康ニーズの解明と復旧から復興さらに生活再建のための支援方法のあり方の検討を行った。その中で，仮設住宅やみなし仮設で暮らす被災者一人ひとりが，日々の生活の中「失われた日常」を取り戻すことを可能にする基本要件とは何か。つまり，コミュニティの脆弱性を強さへと転換するリジリエンスの特徴とは何かついて解明した。具体的な研究方法としては，仮設住宅・みなし仮設での支援活動を展開する地域の社会福祉協議会の取り組みと具体的支援活動を展開する生活支援相談員と住民への生活実態を「生活福祉と健康ニーズ調査」（フィールドワークとしての参与観察調査）として４年間にわたる定点観測的地域調査として計画実施した。対象としたコミュニティで生活する住民の生活意識の変化について，玄田有史等（東大社会研）の『希

望学』研究やポジティブ心理学の知見（外傷後成長に関する諸研究）を手がかりとして生活再建の過程とそのための必要条件と影響要因をリジリエンスの視点から解明を試みた。

具体的には、東日本大震災の被災地である仙台市より車で１時間程の沿岸部の町（山元町）の地域ボランティア・センターを地域リジリエンス研究のフィールドワーク拠点とした。方法として現在，仮設住宅やみなし仮設住宅で生活を余儀なくされている地域住民の震災復興の過程を街づくりにおける①震災の経験を語り継ぐ文化伝承とコミュニティ計画策定の動向調査として住民集会への参加取材や，②震災地域 FM ラジオ局（りんごラジオ放送）の震災直後から現在までの取り組みと青年団活動を通した地域ネットワーク作りの過程を取材調査，さらに，③被災住民の生活再建に向けた地域生活回復力調査，④津波被害地域のフィールドワーク調査からコミュニティのリジリエンスを起動させる要因に関する「ナラティブ（語り）」収集と震災被災者の経験知の風化を防ぐための証言集作成を目指した。

４．研究成果

挑戦的萌芽研究としての位置付けにあった本研究の成果としては、この４年間の間に４５回以上の現地（フィールド：山元町）への訪問を継続することを通して、現地での生活再建とコミュニティの再生を共有する当事者グループ（山元町の復興を考える住民の会：略称：土曜日の会という自助グループ）との出会い、グループへの参加を通して、震災当事者がコミュニティ復興に向けたリジリエンスとは何かを問いかけた。被災地へのボランティアが減少する中で、各当事者自身が経験した「震災体験を風化・喪失させない」為の研究的取り組み（研究１と研究２の統合）が求められていることが明らかとなった。当初の研究目的や研究方法の発展としても、「様々な形で震災体験を乗り越え、そして、その喪失（近親者の死、津波による家屋の倒壊、交通手段（常磐線）の４年以上もの不通状態：尚、2016 年 12 月に山元町の山側に山下駅（新駅）と仙台駅が開通した）による人口流出（減少）、先の見えない、震災住民の意向が反映されないまま行政主導のコンパクトシティ構想への疑問等の問題をかかえながら、現地で踏みとどまることを決意した被災者（インタビュー協力を得た方々）の持つリジリエンスの意味をライフヒストリーの形式で「証言記録（ナラティブ研究の現資料）のアーカイブ」としてまとめるという作業に最終年は集中的に取り組んだ。

その結果、『3・11 以後、山元町で生きる。～被災コミュニティで暮らす住民の記憶のアーカイブ～』(全 277 頁) を報告書 (500 冊) として作成し、現地の町会議会の議員・行政担当者や復興に協力的なボランティア団体機関、研究所・図書館等への寄贈を研究チーム各自が個別に積極的に進めることができた。

今後の課題は、その証言記録がもたらす影響力に関する追跡調査がさらにできれば思う。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 10 件）

①結城俊哉、3.11 東日本大震災を経験した障害者と支援実践の経験から学ぶ「コミュニティ再建のリジリエンスとは何か～リジリエント・コミュニティ構想の萌芽として山元町『工房地球村の実践から』～」『立教大学・コミュニティ福祉学部紀要』(査読無し)第 19 号 2017、65-86.
DOI: 10.14992/00014572

②結城俊哉、ノーマライゼーション理念における障害者の「多様性問題」に関する検討～「共に生きる」ための障害者福祉学の構想～『立教大学コミュニティ福祉研究所 紀要』(査読無し)No.４、2016、pp.69-83.
DOI: 10.14992/00013071

③結城俊哉、地域における障害者の「自立」と「共生」の支援試論『立教大学コミュニティ福祉学会「まなびあい」』(査読無し)第 9 号、2016、133-144.
DOI: 10.14992/00013425

④結城俊哉、ケアの実践現場における研究力養成の覚書～対人援助の理論と実践をつなぐ「ケアの知恵」の試論として～『立教大学・コミュニティ福祉学部紀要』(査読無し)第 18 号、2016、173-195.
DOI: 10.14992/00011981

⑤結城俊哉、社会福祉実践における「ナラティブ（語り）研究」の可能性の検討～臨床研究における質的研究の方法論として～『立教大学・コミュニティ福祉学部紀要』(査読無し)第 17 号、2015、71～88.
DOI: 10.14992/00010832

⑥結城俊哉、障がい者の芸術的創造性の支援方法に関する障がい者アートの研究～アウトサイダー・アート（アール・ブリュット）発見以後の障がい者アート実践の展開『立教大学コミュニティ福祉研究所 紀要』(査読無し)No.３、2015、１-18.
DOI: 10.14992/00011577

⑦結城俊哉、被災当事者の「生活経験の語り」に関するリジリエンスの構成要件の検討：東日本大地震の被災者 S 氏の「語り」の記録を手がかりとして～『立教大学コミュニティ福祉研究所 紀要』(査読無し)No.2、2014、

95-113.
DOI: 10.14992/00010669

⑧結城俊哉、ケアの担い手の臨床力をどう育てるのか～スーパービジョン関係における「成長過程」の検討から～『立教大学コミュニティ福祉学会「まなびあい」』第７号、2014、158-167.
DOI: 10.14992/00011200

⑨手打明敏、東日本大震災の津波被災地の「復興」と公民館『日本公民館学会年報：特集 震災後社会と公民館』第13号、日本公民館学会、2016、16-27.
http://id.ndl.go.jp/bib/028014908

⑩手打明敏、住民活動の拠点としての寺院の現代的意義－東日本大震災後の地域復興における寺院の役割を通してー（原さゆりと共著）『茗渓社会教育研究』筑波大学人間系 第5号、2014、2-17
http://hdl.handle.net/2241/00123156

〔学会発表〕（計　1件）
Teuchi Akitoshi: Resilience in the Tsunami Disaster-Stricken Area and Learning Activities of the Resident － Reconstruction of the Great East Japan Earthquake Area. ASEM LLL Hub Conference: Lifelong Learning and Resilience in Disaster Management 8-10 November 2016 at Rex Hotel, Ho Chi Minh City, Vietnam.

〔図書〕（計　4件）
①　上田孝典、丹間康仁、手打明敏、結城俊哉、池谷美衣子 他、東洋館出版社、『＜つながり＞の社会教育・生涯学習–持続可能な社会を支える学び』2017、223（106-121,65-79,106-121,122-138,151-162）
②結城俊哉,他（精神保健福祉士養成セミナー編）、へるす出版、『精神保健学～精神保健の課題と支援』(第6版)、2017.341(260～276)

③結城俊哉 他、(芝田英昭編著)、自治体研究社、『増補改訂・基礎から学ぶ社会保障』、2016、350（201～218).

④結城俊哉『ケアのフォークロア：対人援助の基本原則と展開方法を考える』（第 2 刷）高菅出版、2016、204.

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

○取得状況（計　　件）

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
結城　俊哉（YUKI Toshiya）
立教大学 コミュニティ福祉学部 教授
研究者番号：２０３０６３７７

(2)研究分担者
手打　明敏（Teuchi Akitoshi）
筑波大学・人間系（名誉教授）
研究者番号：００１３７８４５

研究分担者
上田　孝典（Ueda Takanori）
筑波大学・人間系・准教授
研究者番号：３０４５３００４

研究分担者
池谷　美衣子（Ikegaya Mieko）
浜松学院大学・現代コミュニケーション学部・講師
研究者番号：００６１０２４７

(3)研究協力
丹間　康仁（Tamma Yasuhito）
帝京大学・教育学部・助教